

Q & A

当日頂いた会場からの質問と、登壇者からのご回答

Q. _____ → A.

よそ者は、地域の資産に気づきやすいと思いますが、現地の方が意に沿わない場合、どうされるのでしょうか。

よそ者としては「地域の資産」を可視化して、伝えることで、現地の方が考え・実行するための材料を提供することがまず大事な役割だと考えています。現地の方の意については、対話と合意形成のプロセスの中でその多様性も含めて明らかになっていくものであります。地域の資産に対する地元のスタンスに沿って構想や実践がなされることが基本と考えられます。(遠藤新)

Q. _____ → A.

先生方の事例発表では、地方といえども、町並がある。限界集落と言われている地域は、都市デザインの手法は馴染まないのですか。先生によっては関心を寄せる方はいますか。(役割、任務、期待)

建物以外の緑地や空地を通じた人間の(都市的な)生活について着目し、都市デザインの構想や実践に落とし込むこともあり得ると考えています。(遠藤新)

Q. _____ → A.

まちづくりの個性重視が議論されたが、本当に個性ある事例があるのなら、示してほしい。

個々の小さな事象の積み重ねが、結果としてそのまちの個性になると考えています。お時間ありましたら拙著「米国の中心市街地再生」をご覧ください。(遠藤新)

Q. _____ → A.

都市に愛着を生むにはどうしたらいいか(転勤族でしたが、個人的には小学生の頃が大切ではと思うのですが)

私も子供の頃の原体験は大切だと思っています。子供の頃は、その地域(都市)に根ざした暮らしがあったからです。成人した今でも地域に根ざした暮らし方というのは、人とそれぞれにあるかもしれません。(遠藤新)

Q. _____ → A.

遠藤先生のスライド「市長など、上位者を通じた介入」は政治家や偉い先生と知り合いになること？

大きな物事を決めるときに、市長など上位者の意思が強く決定を左右することがあります。その意思決定に働きかける、というアプローチも正統な方法であるということです。(遠藤新)

Q. _____ → A.

少子高齢化が進むとともに、労働者としてアイデンティティの異なる海外からの労働者・住民が増加することが想定されます。これまでのような背景となる文化圏がほぼ同一コミュニティではなく、異なる文化圏の担い手が増えてくる地域において、その地域のアイデンティティはどう引き継がれ、どう育てていくべきか。生活者がいて、多様性を考えた結果という形が考えうるか。

これまでも日本は大陸ほどダイナミックに文化交流がなかったとはいえ、地方や地域間での様々な交流によって文化を発展させ、文化圏をつくってきたと考えます。摩擦が生じることがあったとしても、そこから生活者の視点から多様性を大事にする方法論があるように考えます。(中島伸)

Q. → A.

バックグラウンドとして、グローバルには、SDGs、パリ協定、国内的には立地適正化、コンパクト & ネットワークは避けられない issue. それらと都市デザインの関係は？

今後益々の研究と実践が必要になる分野だと考えています。都市デザインにおけるグリーンインフラの導入、都市デザインとしての空地デザイン、等はそうした研究・実践の一つと位置づけられます。(遠藤新)

Q. → A.

人口が減りつつある日本において、空き地が増えるのは自然のことのように思います。日本全土で空き地(家)活用の事例が増えつつあり、とても明るいことと思いつつ、いったいつまで持続するのかなと思いました。(国、市民が努力し続けることができるのか)例えば、すべての建築物を2階以下にする等、とんでもない規制をしない限り、日本全土が自然に潤うことはないのではないのでしょうか。

形態規制の一律的な強化、その制度の導入にはかなり困難だと思われます。空き地については、空いていることに価値を見いだせるような活用方法を創出することが先ずは重要だと考えます。賑わい利用だけでなく、自然的な利用もふくめて、低密度でゆるやかな都市空間の姿を構想することが都市デザインの課題の一つだと考えています。(遠藤新)

Q. → A.

構想段階において民間コンサルタントとの違いと「受注」形態、そして経費の調達方法。例えば舞鶴の赤レンガパークのケース、三国町のケースではどうされているのか。

事例の場合は、大学が委託業務として受注し、構想作成や調整を行っています。良し悪しは別として、一般に民間よりも安い価格になることが多いようです。(遠藤新)
大学は民間コンサルタントではありません。地域-大学双方にとって研究テーマや教育としてプロジェクトを立ち上げ実践することに意義が確認される中で受注すべきかと考えています。三国のケースでは初期的に行政からの委託事業という形でスタートしましたが、その後、修士論文研究として学生自らプロジェクトの内容を深める形で調査研究を進めたり、外部の競争的資金を獲得し研究を継続するなどしています。(中島伸)

Q. → A.

まち、地域、都市の「個性」と呼べる、呼ばれている「こと」に対する研究も個性を論じるには必要ではないかと。

何がその地域やまちの個性かということは、時代を経て移り変わるものと、変わらずに個性と呼ばれ続けているものがあると考えています。都市デザイン、まちづくりの構想段階では、何が個性と呼ばれているのかということについても調査、検討を加えています。そして、それらをまとめることも研究として重要な役割だと考えます。(中島伸)



Comments

参加された皆様からのコメント集

1.

「個性」と「多様性」と「都市デザイン」の話がとても面白かったです。都市デザイナーの役割というのは、結局、その「都市」に流れている「構想力」を読み解き、共有できるものとして価値化・可視化する・翻訳することだと思いました。そのときに、衰退の話、インターディシプリナーの話をとどう考えるか、それが今後の大きな課題だと思います。

2.

”個性”や”構想”といった軸で議論されて面白かったです。都市デザインは色んな人の個性を認めるという行為を積み重ねて他者へ構想するという言葉が響きました。

3.

都市の個性を捉えて構想していく中で、都市デザイナーとしての責任を考えないといけないとありましたが、登壇者の方全員の責任を聞いてみたいと思いました。

4.

記念シンポジウムということで、メモリアル（記録）としての講演会と思っていましたが、発表者一人一人の独自性が豊かで、フィールドに拡がりもあり、メモリー（記憶）に残る内容と感じられた。そういう中で「都市デザイン」という言葉がややふるびて感じられる。アーバンあるいはコミュニティがしっくりすると思われる。輩出した人材のバラエティに西村先生の人柄が感じられます。「豊か」rich。ディマー先生のキーワードは新鮮でためになりました。パネルに川添先生を呼んだのは大正解です。3.16に更なる盛り上がり期待しています。進行お疲れ様でした。ありがとうございました。

5.

都市計画（デザイン）の潮流が変化していること、新たな仕組みが始まっていることが改めて理解できた。

6.

都市の個性というのは、元々都市にあって高度経済、モダニズムを経て、見えなくなっているから、今、個性を再生していくことなのか。個性は固定的なものではなく、変化するものだとすると、個性を継ぐことが必要ということか。改めて考えさせていただきました。ありがとうございます。

7.

リレーシンポジウムの初回として、都市デザイン研究室の過去からの流れが少し見えてきたのが楽しかった。個性／都市／デザイン／研究／実践 etc. のテーマの組み合わせが良い。

8.

法学部の学生なので、都市デザインの責任についての議論をさらに伺いたいです。特に法律上の責任についてです。西村先生は、輦の浦訴訟などにも関わられていたと思いますが、都市デザイナーには法的責任は伴わないだろうし、何か紛争が起こったときに、訴えられるということも日本では少ないかと思います。それでも都市デザイナーも人なので、誤りはあるし、恣意、欲もはたらくので、法によって最低限律すべきこと、法的地位を明らかにすることも大事じゃないかと考えます。

9.

ありがとうございました。地域の個性は、世代が交代していく中でも、読みながら伝えていけるのではないかと思います。研究から新しく見つかることもあるので、そういう意味でどの都市も持続可能性を秘めているのではないのでしょうか。議論の主語、言葉の哲学がそれぞれ異なっているので、拡散されていましたが、それも本当に議論の真実だなと思いました。

10.

結局、現在の都市デザインとはどんなもので、今後、都市デザインはどこへ行くのか。また、世の中は、都市デザインを必要としているのか。真野先生の問題提起（図法、メソッド論）には触れられなかったのが、その辺も含めて論じていただけるとありがたい。

11.

社会背景の変化により、「都市デザイン」が別のモノに移り変わっている様が少しだけ伺えました。また、「構想」という言葉に代表されるような都市へのプランナーの姿勢が非構想的デザインに移っているコトを感じました。

13.

登壇者、パネラーの皆さんの問題意識に非常に共感するとともに、もやもやしたものを言語化していただき、スッキリしました。川添さんの確信犯的なパンチのある質問も議論を面白くしてくれました。皆さまありがとうございます。

15.

"中島伸先生の「シナリオ型マスタープランを作成し、地域の課題を網羅的に解決する」という考えに感銘を受けました。実際に作成するのは難しいと思いますが、これができる、アクション・プランがこれからのまちづくりの羅針盤にもなりえるでしょう。また、空き家問題が解決しないのは、身内しか信用しない文化がある地域の可能性があります。土地は地域の公共財的側面もあることを地権者が理解していけば、問題解決の糸口になると考えています。"

17.

個性＝ユニークな「空間」を（構想ベースかシナリオベースかは置いておいて）デザインするだけでなく、「人のつながり」「仕組み」をデザインすることも都市デザインの大きな役割としてさらに必要なスキルになりつつあると実感。
≒コミュニティデザイン

19.

都市計画・都市計画家が必要なのか、改めて考える機会となった。そこで、都市の専門家がなすべき役割はあらゆる人をつなぐことではないかと感じた。

21.

構想はなにか、もっと議論すべきです。

23.

非常に豊かな内容のシンポジウムであると思います。何らかの形で出版等されることを期待します。

12.

クリス先生のプレゼンに心を打たれました。なぜなのだろうと考えているときに「責任」という言葉が出てきて、納得できました。

14.

川添先生の最後の言葉で都市と、都市デザインの役割や意味付けの再定義が必要では、というお話があり、とても印象的でした。それと関連し、これからの次代に向けた、一定期間つづく力強い方法論を記す、残すべきでは？という中島先生の発言にも共感しました。中島伸先生の新たな取り組みは、とても興味深いです。西村先生の前向きでシンプルなお言葉にとっても励まされました。

16.

「研究」と「実践」をテーマとしていましたので、民間企業や自治体の方のお話も聞けるとまた違った面白さがあるのかな、と思いました。

18.

出来上がる都市の個性から、都市をつくるプロセスの個性が問われている風潮を感じる。都市が持続するためのシステムをセットで提案するためにプロセスをイノベーションする力が必要。

20.

"都市デザイン（都市計画を含めて）どのような研究の地平があるのか、イメージを伝えられるようになるといいと思いました。都市 Designers 自体に対する研究が必要でないかと感じます。人の動きを扱うので、経営学の組織論など建築・土木・社会学以外にも学際的な連携も必要と思いました。"

22.

西村先生の「都市空間自体が構想力を持っている」という言葉が一番印象的でした。

24.

中島伸さんのお話が、研究と実践についてすごくよくまとめられていて分かりやすかった。